

『オメガの匂いは魔族も誘う～その身体を餌にされて快樂堕ち～』

著：黒兎

ill : minato.Bob

——知っているか？ 番（つがい）に出会えないまま発情期を繰り返すΩは、その業深さから悪魔を引き寄せる。そして、悪魔と交わるうちに、自らも魔に堕ちるんだ。

詞音（しおん）にそう教えてくれたのは、何年か前に一夜限り、彼を買った男からだった。もう男の顔も名前もとっくに覚えてはいないのに、押しひそめた荒い息遣いで洩らす掠れ声だけは、今もはっきりと詞音の耳に残っている。まるで、何かの呪いのように……。

（悪魔……）

それがどんなものか、その時の詞音はまったく知らなかった。けれど、漠然と恐ろしく忌まわしいものだと感じながら、一方で、なぜかはわからず胸が震えた。

ぽっかりと開いた深淵の向こうに、チラチラと赤い鬼火が揺れている。その炎に見据えられると、手足の力が抜け、次第に何も考えられなくなっていく。

ニヤリと、詞音を組み敷いている黒い獣が嗤った。

「……ひっ！」

それ——には、毛むくじらの腕が二本生えている。分厚い胸も、異様にねじ曲がった背中も、びっしりと硬く黒い剛毛に覆われていた。

四つ足の獣にしては、脚が長い。その間からは、チラチラと動く漆黒の尻尾が覗いていた。

獣のような外見——なのに、かつては人であった形も残っていて、それが見る者のおぞましさをいっそう掻き立てる。

「これが……、悪魔っ……」

昔、男から聞かされた話を唐突に思い出して、詞音は直感的に目の前の不気味な獣がその悪魔だと確信した。

悪魔は人間に憑く。そして、憑いた人の心や姿形さえも、恐ろしく邪悪なものへと変えてゆくのだ。

そろそ発情期が近い詞音は、今夜は客を取ることを諦め、郊外にあるかつては教会だった廃墟で一夜を明かすつもりだった。

教会跡とはいっても、ここには十字架も聖像も残ってはいない。砕け散ったステンドグラスの欠片や月もない闇に黒々と浮かぶ尖塔が、過去の面影を伝えるだけだった。

信仰を失って久しいこの寂しい場所に悪魔が巢食っていたとしても、別に不思議はなかったのかもしれない。

これまで感じたこともない異様な気配に怯え、振り返ろうとしたせつな、詞音は抗いようのない圧倒的な力で聖堂の床に押し倒されていた。

「おまえ……Ωか？ いい匂いがするぞ……」

「あ……」

黒い獣の口から、どこか不明瞭ではあるが明らかに人間の言葉が聞こえてくる。それがにわかには信じがたくて、詞音は呆然とその忌まわしいおもてを見つめ返した。

チラチラと、獣の闇色の眼窩で血のように赤い鬼火が躍っている。目が離せず、見つめれば見つめるほど、逃れようと床を掻く詞音の指先から力が失せていく。

焦る詞音の体の芯で、ふいにドクンと覚えのある妖しい熱が湧き上がった。

「あ……、あぁっ……！」

相手が悪魔だろうと、他人の手で触れられている感覚が、Ωの体の奥で燻り続けていた危うい本能を刺激してしまったのだろう。

ズキンズキン……と、下腹の奥がむず痒いように、痺れるように疼く。獣に組み敷かれている腰を思わず振ると、耳元で暗い笑い声が響いた。

「抱かれないんだらう……？ 犯されたいんだらう？ おまえたちは、皆そうだ。欲望のままに生きる獣と同じ……」

（……そう、なんだろうか？）

胸が締めつけられる。痛くて、苦しくて……。獣の言うとおりに、発情期を迎えた体は誰かに抱かれなければ満たされない。この飢餓も煩悶も、欲しがるだけ抱き尽くしてもらわなければ終わらない。

Ωとは、そういうものだ。

初めての発情期が訪れた時、すべてのΩは自分の体でそれを覚え込まされる。どれだけ理性で運命を拒もうとしても、Ωである限り誰一人としてその性から逃れることはできなかった。

あさましい欲情に身悶えて泣き、這いずって、たった一人の定められた番の腕を求める。

けれども、それが叶わなければ、手当たり次第に他人の劣情を喰らわずにはいられない。ただ身の内の忌まわしい熱を消すためだけに……。

Ωとして目覚めた時から、おまえは欲情のままに流される獣と同じだと、周囲から哀れみと蔑みの目を向けられてきた。肉親の家族でさえ、その嫌悪は変わらなかった。

（俺も、醜くて穢れた獣だ。発情期の度に数えきれない他人と交わって、生きるために体を売って……。この悪魔と何も変わらない）

容赦なく覆い被さってくるねじくれた背中に、詞音はすがりつくように腕をまわしていた。

おぞましいのに、得体の知れない存在が怖くて堪らないのに、それ以上に火の点いた体が、満たしてくれる者を欲していた。

悪魔の吐息は、腐臭のような生臭さで詞音の薔薇色の唇を食み、小さな舌に冷たく絡みついてくる。人間のものよりはるかに長いそれが口腔を舐め、ドロリとした粘液で喉の奥まで汚そうとする。

息苦しさに咽せ、身を振った詞音の胸元でビリビリとシャツが裂けた。華奢な腰のラインを際立たせる黒いスリムパンツも紙のようにたやすく引き裂かれる。

それが、悪魔の鋭く伸びた爪の仕業だと気づいた時には、真っ白な肌まで薄く切り裂かれて、鮮やかな真紅の血を滲ませていた。

なめらかな胸に滲み出した鮮血を長くて分厚い舌で舐め取り、美味そうに啜って、悪魔はにんまりと笑

う。

「やはり、発情期のΩの血の味は格別だな。いやらしい匂いがプンプンしやがる……。さあ、脚を開け。今度は精液を啜ってやろう」

舌舐めずりして命じる獣に促されるまま、詞音は自分からノロノロと膝を抱え、あられもない形に体を開いていた。

Ωの本能というばかりでなく、詞音を搦め取る悪魔の瞳やその声音には、人の抵抗を強引にねじ曲げる魔力でも宿っているかのようだった。

（嫌……、怖い……、嫌あ……）

そう叫びたいのに、声にならない。それどころか、詞音の意志とはまったく正反対にせがむみたいにしなやかな腰が浮き上がる。

「あっ……、ああっ！」

ベロンと、冷たい舌がやわらかな内腿を舐めた。そうして、生臭い吐息が下腹にかかる。

詞音の性器は黒い獣の姿をした悪魔に舐られながら、もう痛いほど張りつめている。獣の顎門が薄い腹に反り返った性器を深々と銜え込んだ。

「やあっ！ 痛い……、いた、い……。ああっ、あああ、あっ、ああ……」

わざとなのか、長い犬歯が性器の根元に食い込んできた。確かに激痛を感じているはずなのに、肉厚な舌に弱みを舐めまわされ啜られると、爪先までジンジン痺れて、頭の中が真っ白になる。

「いいっ……、いい、あっ……あんっ、いいっ」

気持ちいいと、無意識にか細く啜り泣いていた。悪魔の腕に抱えられた下肢が、艶めかしくゆらゆら揺れる。

犬歯を突き立てながら激しく吸い上げられて、詞音は悲鳴のような泣き声を上げながら獣の口の中で達していた。

「ああ……、ハツハツ……、あああ……」

溢れ出した精液と混じり合った血を、悪魔は美味そうにゴクゴクと飲み干した。そして、一滴も残すまいとするように、ヒクヒクと痙攣している下腹まできれいに舐めまわす。

「あんっ！ ハアン……、あっ……」

その狂おしいような舌の動きに翻弄されて、詞音はまた感じ入った悲鳴を上げ、白い尻を見せつけるように掲げていた。

「ここに……欲しいのか？」

確かめてくる獣の声も、蕩けそうな快樂にいつそう掠れている。その響きだけで、昂りきった詞音の肌はゾクリとわなないた。

「欲しい……」

もう待ちきれないと、素直な囁きが渴いた唇から洩れる。なぞるようにそこへ触れてくる獣の鋭い爪に薄く傷つけられる微かな痛みを感じながら、薄紅色をした襞の奥の疼きがますます強くなる。

「は、やく……、早く、挿れてっ……」

卑しいねだり声を上げてから、思わず細い指を伸ばした先にあるものに、詞音は信じられずに息を呑む。

人間のものよりずっと巨大な悪魔のペニスは、真っ黒でゴツゴツと節くれ立っていた。

恐ろしい凶器のようなその質量と形に、とっくに理性を失っているはずの意識さえ怖じ気づいて、四肢が凍りつく。

「ん？ どうした、コレが欲しいんだろう……？」

詞音の視線を鬼火の目で追った悪魔は、楽しそうに問いかけてくる。

詞音が怯えれば怯えるほど悪魔の快楽が増し、おぞましい凶器もいっそう膨れ上がっていくようだった。

「あ……」

「どうした？ もっとねだってみせろ。ほら……」

あさましい台詞を促すように、長い爪がか細く喘いでいる詞音の唇をゆっくりとなぞる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>